第 32 回　夏のインターウニ・ゼミナール（ドイツ語ドイツ文化ゼミナール）

32. interuniversitäres Sommerseminar für deutsche und japanische Kultur

参加者募集のお知らせ

夏のインターウニは 1978 年以来毎年夏休みに開かれている合宿ゼミナールです。ドイツの文化・社会に関心を持つ日本人とドイツ語圏の学生・教員たちが、全国のさまざまな大学から集まって(*interuniversitär*)、一つのテーマについて日独の文化を比較・対照しながら(*interkulturell*)、専門の枠を超えて(*interdisziplinär*)、ドイツ語で話し合うゼミナールです。また、参加者が、国籍や文化の違いはもちろん、教師・学生・社会人といった立場の違いや世代差・性差を超えて互いに学びあう(*Inter-Lernen*)という姿勢を大切にしています。このゼミナールが目指しているのは、単なるドイツ語会話の練習ではありません。現代のさまざまな問題についてドイツ語のテクストも読みながら、ドイツ語母語話者もまじえて、できる限りたくさんドイツ語で議論してみましょう！

近代化と文化交流 ― ドイツとアジアの 150 年

江戸時代ももうすぐ終わろうという 1861 年 1 月 24 日（万延元年 12 月 14 日）、日本とプロイセンが修好通商条約を調印しました。そこで来年 2011 年は日独交流 150 周年として、さまざまな行事や催し物が準備されています。インターウニとしても、インターウニなりの批判的視点から、この 150 年の歴史を振り返ってみたいと思います。

とかく文化交流史というものは、心温まるエピソードや美談に彩られて語られがちです。ケンプファー(ケンペル)やシーボルト、そして森鷗外から説き起こされる日独交流の物語は、善人と悲恋、友好と相互理解に満ち溢れています。しかし、江戸時代末期といえば、隣国ではアヘン戦争が起きていたような時期にあたります。「ドイツにとって北海道は植民地とするのに適した土地だ」と考えたドイツ人が日独交流史の初期段階で重要な役割を果たしたとしても、不思議はありません。冒頭にあげた不平等条約は、ヨーロッパとアジアの圧倒的な力関係の差を表すものでもありました。目覚めた日本は、近代化に向けてのスタートダッシュを切って大きな成功を収めます。やがて日本はすぐに、同様の不平等な関係を朝鮮に対して押しつけてゆくことでしょう。

第一次世界大戦では、日本はドイツがせっかくアジアに築いた拠点である青島（チンタオ）を奪って自らの中国進出の拠点とします。このとき作られた徳島などのドイツ人捕虜収容所から、ベートーヴェンの第九交響曲の国内初演やバウムクーヘンの普及をめぐる日独の友情物語が生まれていったことは、映画『バルトの楽園』などを通して知られるようにもなりました。しかし私たちは、そうした美談物語の背後に、近代化をめぐるどんな利害関係がドイツとアジアの間で進行していったのかという権力闘争の文脈にも、同時に目を向けていきたいと思います。そもそも近代化というものは、少なくともヨーロッパにおいて、どうして植民地主義と表裏一体に進行せざるを得なかったのでしょうか？ そして、その中で「遅れてきた国民」であるドイツは、日本と、そしてアジアと、どのような関係を築いてきたのでしょう？　また日本は、刑法や医学だけでなく、どんな近代化モデルをドイツに学んできたのでしょう？　今回のインターウニでは、20 年以上前のインターウニ参加者だったラインハルト・ツェルナー教授（ボン大学）をお迎えし、また韓国からもゲストをお招きして、ドイツと日本の 150 年の交流史を、できればアジア全体にまで視野を広げつつ、オリエンタリズムやポストコロニアリズムなどの人文系諸科学の最近の研究成果もふまえて議論してみたいと思います。

ゼミでは基本的に、小人数グループで、事前に配布されるテクストについてじっくり討論し、その後、議論の内容を全体会で報告してさらに全員で討論します。裏の「参加資格」にも記したとおり、ある程度のドイツ語力は参加に必要ですが、多少足りないところがあっても意欲さえあれば大丈夫、とも考えています。それでもまだ自分のドイツ語力に不安がある方もいるでしょうが、参加者同士で助け合ったり一緒に準備したりするうちにきっとなんとかなります。まだドイツ語に自信がなくて「何か言いたいことがあってもどう言えばいいのかわからない」、あるいは「ドイツ人の発言がよくわからない」といった場合には、日本語も使って発言や理解を助けあうようにしていきます。自由時間には野尻湖や湖畔で水泳、ボート、ジョギング、サイクリング等のスポーツで思いっきり気晴らしすることもできます。ドイツ語力も考え方もさまざまな日本やドイツや韓国からの新たな友人達と、大いに楽しく議論してみましょう。ドイツ語漬けの充実した 5 日間が待っています。積極的な参加を期待しています！

2010 年 6 月

(b.w. /裏に続く)

記

- 日　時：　2010年7月31日（土）～ 8月4日（水）
- 場　所：　〒389-1303　長野県上水内郡信濃町野尻湖　ほとり荘　　Tel: 0262-58-2606
- 参 加 費：　39,000円　（４泊５日の宿泊・食事を含む。交通費は含みません。）
- 参加資格：　ドイツの文化・社会に関心を持ってドイツ語を勉強している学生・院生、および社会人。
  （３年程度以上のドイツ語学習歴があることが望ましい。専攻は問いません。）
- 募集人数：　25名程度
- 申込締切：　2010年7月20日（火）
  （それ以降は問い合わせてください。それ以前でも募集人員に達し次第、締め切ります。）
- 申込先：　**http://www.interuni.jp/anmeldung** の申込みフォームから

（携帯から申し込む場合は　**http://www.interuni.jp/keitai**　から）

◆　上記申込みサイトが使えない場合や、申し込みしたのにメール連絡がない場合、またゼミについての質問がある場合等は、メールで下記の実行委員会宛に連絡してください。

◆　インターウニについては http://www.interuni.jp/を、また、過去のゼミナールについては http://www.interuni.jp/Sommergeschichte.html をご参照ください。

◆　往復の交通手段として、東京（池袋駅）から現地まで往復バスをチャーターする予定です（片道4500円）。

講 師（予定）：　足立信彦（東京大学）、　相澤啓一（筑波大学）、Stefan Buchenberger（神奈川大学）、Christoph Hendricks（法律家）、小林和貴子　（慶應義塾大学）、境一三　（慶應義塾大学）、　高橋優（宇都宮大学）、辻朋季（筑波大学）、Reinhard Zöllner（ボン大学）Song Chol Park（高麗大学）　ほか

主 催：　インターウニ実行委員会　（代表：相澤啓一）
（ホームページ：　http://www.interuni.jp/
連絡・問い合わせ先：http://www.interuni.jp/mail)

協 力：　Goethe-Institut（ドイツ文化センター）
Deutscher Akademischer Austauschdienst（ドイツ学術交流会）

	Samstag.31.7.	Sonntag, 1.8.	Montag, 2.8.	Dienstag, 3.8.	Mittwoch, 4.8.
8.00		Frühstück			
9.00		THEMA: I Textarbeit ＋ Diskussion in Gruppen	THEMA: II (Studentischer Tag) Diskussion in Gruppen	THEMA: III Textarbeit + Diskussion in Gruppen	Evaluation （Präsentation der Gruppenarbeit）
12.00		Mittagessen ＋ Pause			Nach dem Mittagessen：Abreise
14.00	Anreise	Gruppenarbeit（am Protokoll）	Freier Nachmittag	Gruppenarbeit（am Protokoll）	
15.00	Einführung				
	Eingangsvortrag Brainstorming	Protokolle der Gruppenarbeit ＋ Diskussion		Protokolle der Gruppenarbeit ＋ Diskussion	
17.00					
19.00		Abendessen + Pause			
	Feuerwerk	Abendprogramm	Vortrag der Gäste + Diskussion	Schlussfeier	*Änderungen vorbehalten*
21.00	！！！？？	Kneipe / Nachtruhe	？？！！！		